

## 雨降らし

しゃん、と小さく鈴が鳴る。それが合図であるかのように、さらさらと雨が降り出した。

いつからだろうか。子供が雨を疎むようになったのは。

いつからだろうか。自分のもとなやつて来る人がいなくなったのは。

雨の中ではしゃぐ子供の姿を、今ももう見かけることもなくなり、自分の居場所もなくなつて。

いつなのだろうか。自分が、消えてしまふのは。

よく晴れた朝、日曜日。特にすることもなく、たまには散歩でもしようか、と葵<sup>アオイ</sup>は家を出た。

穏やかな日曜日の朝にふさわしく、空は青く晴れわたっている。日曜日だけあって、出会う人も少ない。どこかのんびりとした時間が過ぎていた。

## 森川佳子

こんな日も、悪くない。そう思つて大きく伸びをした、その時。ふと感じたにおい。

「雨が降る……?」

空を見上げる。すると、ぽつり、ぽつりと雨が降ってきた。手ぶらで出てきたため、傘を持っていない。

「どっか雨宿りできる所……あー!」

そうだ、確か近々工事が始まるらしい、小さな神社。あそこなら、ここから近い。

駆け足で神社へ向かう。雨は、どうしてか、晴れているのに降っていた。

「ふう」

神社の屋根の下でほっと息をつく。多少濡れてしまったが、すぐ乾くだろう。タオルで髪を拭い一つ、外へ目を向けると、そこには。

——思わず、言葉を失った。それは、とても幻想的な景色だった。雲の間から

は澄んだ青が覗き、光が射し、静かに降る雨はきらきらと光を反射して輝く。そして、その雨の向こうには、儂げに淡く光る、虹。

「綺麗……」

虹を見るのは、何年振りだろうか。幼い頃は、虹を見る度に大喜びしていたのに、いつのまにかそれもなくなり。久し振りに見た虹は、驚く程に綺麗で——。

「これを綺麗だと言う人間は、久し振りに見た」

突然聞こえた声に、はっと我に返る。そつと隣を見れば、不思議な格好の少年が座り、こちらを向いて薄く笑っていた。

「そう驚くこともないだろう」

紺の着流し、白い髪に薄い墨色の瞳の少年は、そう言つて再び笑つた。

「お前の名は?」

「葵、です……。あなたは?」

「そんなに畏まらなくてもいいんだが。そうだな……露葉<sup>ツユハ</sup>、とでも呼んでもらおうか」

呼んでもらおう、ということ、本当の名前は違うのだろうか。そう思っているのが伝わったのか、目の前の少年、露葉

は苦笑した。

「これといった名が無いからな。今は」

「今、は？」

「ん？ ああ、言い忘れていたな。俺は、この神社の主だった。もう追い出されてしばらく経つが」

「すごい！ 神主さんやってたんだね」  
畏まらなくてもいい、と言っていたので、少しくだけた言い方に直してそう言う  
と、露葉はきよんとした顔で「神主？」  
と呟く。そして、くつくつと笑い出した。

「何か変なことでも言ったかな、私？」

「いや、大丈夫だ。そう思うのも無理はないな」

葵が心配げに呟くと、露葉はようやく笑うのをやめた。そして、ふと憂いを帯びた目で、神社を仰ぎ見る。

「工事が決まるまでは、ここは俺の居場所だったんだ。とても、大切な」

そう言った姿は、先程の彼とは打って変わって、悲しそうだった。葵は少しうつむくと、ふいに顔を上げ、露葉に声をかける。

「じゃあ、一緒に守ろう！」

『じゃあ、一緒に守ろう！』

その一言を聞いた時、俺は耳を疑った。守る？ 一緒に？ 確かにここは俺にとつての居場所だ。できることなら、ずっとここに居たいと思う。でも。

「こは、そのうち取り壊される。それは、決まっていることなのだろう？」

そう聞くと、葵はぐつと押し黙る。それはそうだろう。神社の取り壊し。これは既に決定されたこと。簡単に覆えるはずがない。

「でも……大切なんでしょう？」

「それはそうだが」

「なら、最後まで諦めちゃだめだと思うんだ。やらなくて後悔するより、やって後悔するほうがいい」

「……どうして、初対面の相手にそこまで協力しようと思うんだ？」

疑問だった。なぜ、そこまでできるのか。俺が問えば、目の前の少女は少し照れくさそうに笑う。

「私もこの場所、好きなんだ。小さい頃はよく来てたの。だから、露葉の居場所を守る手伝いがしたい」

彼女の笑顔を見て、雨の降る風景を「綺麗」だと言った彼女を思い出して。どのみち消えゆく身ならば、最後まで足掻いてみようと思った。

さて、と呟きつつ立ち上がると、足音についている鈴が軽やかに鳴る。

「そろそろ帰ったほうが良い。途中までだが送っていいこう」

お昼時。あのあと、お腹も空いてくる頃だろう、ということと葵は露葉に送ってもらっていた。黙って歩くのも退屈なため、葵はいくつか隣を歩く露葉に質問してみるが、彼はどの質問に対しても、どこかはつきりしない答えを返すばかりだった。

「露葉って不思議な格好してるよね。いつもなの？」

「……まあ、そうだな」

「そういえば、いくつなの？ 私は十六なんだけど」

「さあな」

「……ちゃんと聞いている？」

「逆に聞けが。それを聞く必要があるのか」

「特に必要という訳でもないけど——あ、また雨降ってきそう」

ぼつりと眩いた葵の言葉に、驚いたように少し目を見開く露葉。

「雨が降るのがわかるのか？」

「うん、まあ。雨のおいがするっていうか。あんまり理解してもらえないことが多いんだけど、ね」

「成程な」

「え、理解できるの？」

驚く葵を見て「なぜ驚く？」と、不思議

そうな顔をする露葉。

「だって、雨のにおいなんて普通はあまりわからないんじゃないの？」

「俺がわからないはずがない」

それだけ言うと、それきり口を閉ざしてしまふ露葉。葵も、彼にこれ以上のことを聞いても答えないだろうと思ったのか、言及しなかった。

雨が降る前に帰りたい、という葵の希望で、二人はその場で別れ、葵は自宅へ走っていく。露葉は葵を見送っていたが、やがて雨がさらさらと降り出すと、鈴の音をひとつ残して、雨に溶けこむように消えた。

それから六日後、土曜日。この日は、朝から雨が降っていた。身仕度を済ませ、朝食をとりながら、ぼんやりと窓の外を眺める。

あの日曜日の後、わかったことがいくつかあった。私が露葉と出会った神社には、神様が祀られていたこと。今はもう、その神様は神社にいないこと。神社の存在を知る人がほとんどいないこと。最近、工事が難航しているらしいこと。露葉を見たことがある人が、一人もないこと。露葉とは、なぜか雨の降っている時にしか会えないこと。

この六日間でわかったことは、私に一つの答えを示しているようで。それ以上考える気も起こらず、私は家族に一声かけてから、傘を持って家を出た。

「葵。か。おはよう」

神社の柱に背を預けて目を閉じていた露葉に声をかけると、笑ってあいさつを返してくる。傘を畳んで隣に座る。

「ねえ、工事が難航してるみたいだよ」「そうらしいな」

「もしかしたら、工事されずに済むかもね！」

「そうなればいいな」

いつも通りの、どちらかといえば私が一方的に話題を振る会話。初めて会った時こそ饒舌だった彼だが、普段から饒舌という訳ではないことが、何回か話してみてもわかった。だから、今日も私がいくつか話題を見つけてきて、話かけていたのだけだ。

「ああ、そういうえば。見せたいと思っていったものがあつてな——」

突然、露葉がそう言いながら、お堂の中に姿を消す。しばらく座って待っていると、彼は何かを持ってお堂から出てきた。

「それは？」

彼が持っていたのは、望遠鏡のようなもの。

「手に持って、中をのぞいてみる」

言われるままにそれを手にとり、中をのぞきこむ。

「これ……万華鏡？」

くるりと回せば、柄が変わる。万華鏡の模様は、次々と表情を変え、どれ一つとして同じ表情はない。

「なつかしいなあ……」

小さい頃は飽きずにと見てたっけ。

「どうして、万華鏡がお堂の中に？」

「俺にもわからない。この前入つてみた時に見つけたんだ」

誰かの忘れ物かもな、と言つて笑う露葉の表情は、ほんの少しぎこちない感じでしたが、気がなつた。

「ねえ、露葉——「葵のほうは」……え？」

「葵のほうは、工事が難航している他に、わかつたことはあるか？」

「あ、うん。この神社の近くに住んでる人が、難航してるのはたたられてるからじゃないかって噂をしてるみたい。でね——」

露葉はどこか落ちつきがないのが気になつたのだが、工事を止める方法はないか話しているうちに私は、どうしてかすつかりそのことを忘れてしまつていたのだつた。

「じゃあ、またね！」

正午を迎える少し前。手を振つて去つていく葵を見送ると、露葉は柱にもたれかかつて座り、屋根の下から空を仰ぎ見る。

「すまないな、葵」

嘘をついた。それに、葵は俺の様子がおかしかつたことを気にしていたようだが、話している時に、気にしていたことを忘れさせた。

「まだこんな力が残つていたとはな」

人ならざるモノとしての力など、ここを追われた時に失くしたと思つていたので。

自分が「何であるか」には気づいてほしくない。だが、葵にはそのうち気づかれるだろう。その前に、どうにかしてこの場所を守りたい。

「工事が難航しているとは都合が良い。——最後までいい、約束は違えずに終わりたいな」

鈴がしゃらん、と鳴つた。

次の日も雨だつた。さらさらと雨が降る中、葵が神社にやつて来た。だが、いつも柱よりかかつているはずの露葉の姿がない。

「露葉……？」

不安そうに呟くと、葵はお堂の扉を開ける。そこには、お堂の中央に静かに座る

露葉がいた。

「どうした、葵」

「あのね。気になる話を、聞いたの」  
葵は、おそるおそる話を切り出した。

昨日の夜、この神社の前を通りかかった時に、誰もいないはずの境内から、鈴の音が聞こえたと言ふ人達がいること。その人達の中には、白い髪の少年が見えたと言ふ人もいること。町の人達は、神社に祀られていた神社のたたりが始まるのではないかと噂していること。そして。

「——昨日の夜は、雨だつたよね？」

葵の話を黙つて聞いていた露葉は、話が終わると寂しげに笑つた。そんな露葉を見ながら、葵は静かに問いかける。

「露葉が、この神社に祀られた神様、なんだよね？」

「……よくわかつたな」

「本当はね、もう少し前から、そんな感じはしてんだ」

そうか、と露葉が呟く。しばらく二人の間に降りる沈黙。先にそれを破つたのは、葵で。

「本当に、たたるつもりなの？」

「いや。そのつもりはない。……ただ、たたりの話が広まれば、工事を止めることができるのではないかと、そう思ったんだ」

「神社の主つていうのは、神社の神様って意味だったんだね」

「まあな。気づかないなら、そのままのほうがいいと思つていた」

ふと、露葉が窓の外を見る。雨はあがったようで、雲の切れ間からはうつつすらと光が射していた。

「……葵。そろそろ帰つたほうがいい。そして、もうここには来なくていい」葵が目を見開く。

「どうして？」

「たたりの噂が広まつたんだ。工事はおそらく中止だろう。それに、たたりの噂のある神社にお前がいれば、怪しまれるぞ」

「私は別に——」

反論する葵に向かって、露葉は静かに微笑む。

「お前は人間だ。住む場所を追い出され、今や神かどうかもわからない人外のモノに、関わらないほうがいい」

鈴がしゃん、となる。気づけば、露葉の姿は消えていた。葵は、しばらくその場に立ちつくしたままだった。

あれから、露葉を見ることがなくなつた。雨の日も、露葉がいつもの場所にいることはなく、たたりの噂だけが露葉の存在を示していた。

工事の話は、あの日露葉が言つていたように、あれきり聞くこともなくなり、いつも通りの毎日が戻つてきたが、戻つてきた日常はどこか味気ない。のんびりとできる日曜日も、今の葵にとつては、特にすることもなく、時間をもてあますだけの日だった。

確かに、学校に行つて、友達と過ごして。休日はどこかへ出かけたなり、二度寝してまつたりしたり。そんな日常が楽しいと思つた。

でもやっぱり、何か違ふ、と思つてしまふのは、どうしようもなく。そしてある日。事態は急転した。

走る。走る。走る。

「露葉……」

急げ。急げ。とにかく今はゆっくりしている訳にはいかないと、自分に言い聞かせつつ、葵は走る。

事の始まりは十数分前。朝、祖母から聞いたことがきっかけだった。

——そういえば、あの神社。最近話を聞かないと思つたら、また工事が始まるんですつてねえ。たたりがなければいいけど——

工事が始まる。そう認識した途端、葵は家を飛び出していった。そして、今に至る。露葉が心配だった。

「大丈夫、かな……」

走りながら、ぼつりと言葉が零れる。葵は、一度そつと目を伏せると、再び前を向いて、ひた走つた。

ゴウン、という音が境内に響く。工事は、既に始まつていた。次々と神社が崩されていくその無情な光景に、葵は境内に入ることもできず、ただ立ち尽くしていた。

「露葉？」

そう呟きつつ辺りを見回すが、その姿は見つからず。意を決して境内に足を踏み

入れ、気づかれないように慎重に歩き回る。

すると、お堂から少し離れた位置にある、水の枯れた池の側に佇む白髪の少年を見つけた。そっと葵が近づくと、少年は気配を感じて振り向く。

「……葵!? 何故ここに……」

「露葉が大丈夫か心配で……」  
笑いを収めて葵がそう言うのと、露葉は難しい顔をした。

「来るな、と言ったはずだが」  
その声は、わずかに硬い。露葉は続ける。

「俺は誰にでも、視える。訳ではないし、見つかって疑われるのはお前だ。それに、人外のモノと関わらないほうがいい、とも忠告した」  
帰れ、と言外に言っている露葉に、葵は唇を噛む。

「わかつてる。でも、露葉は人外のモノじゃないよ。ここの神様だったんでしょ? それに、この場所が大切だ、って言ったよね。今、そこが壊されてるのに、

何も思っていないはずだよ」

だから心配だった、と呟く葵。露葉が呆れたようにため息をついた。

「……とんだお人好しだな」

それは、さつきより硬さのとれた声。

「確かに、大切にしていた場所が壊されるのは辛いけど、だからといって逃げようとは思わない。お前にそこまで心配される程、柔くはないぞ」

そう言って、露葉は薄く笑う。葵もほっとしたように笑い返し、崩されていく神社を見る。

「思えば、お前と初めて会ってから、一週間程しか経っていないのだな」

「なんか、そんな気がしないけどね。それだけ楽しかったんだよ、きつと」

「……そうだな」

聞こえるかどうかかわからないくらいの声で、葵が「ごめんね」と呟いた。

「何がだ?」

「一緒に守るって言ったのに、守れなかった」

そうやって二人が話す間にも、神社は壊されていく。だが、不思議と二人の気持ちは穏やかだった。

「……気にするな。むしろ、協力してくれたことに礼を言いたくないだ」

少し間を置いて、露葉が返した。着物の袂から、彼はあの時の万華鏡を取り出す。

「あの時、どうして万華鏡があったのかわからない、と言っただろう」

「うん」

「すまないな、嘘をついていた」

「……え?」

「これは、最後にここを訪れた、子供が供えていつてくれたものだ。本当のことを言えば、俺の正体が解わかってしまうだろうから、黙っていた」

お前の記憶にも細工してしまったんだが、と申し訳なきように笑う露葉を見て、驚く葵。だが、思い当たる節があったのか、仕方ないなあ、と笑った。

「気にしないで、気づかれたくなかった、って気持ち、私にもわかるもの」

「そう、か。良かった」

露葉は、ほう、と息を零す。そして、彼らしくもなく悪戯っぽい笑みを浮かべ、言った。

「約束、守れなかったからな。一矢報いて終わらせなければ、気が済まない」

そんな彼を見て、くすりと葵も笑った。

元々、俺は雨を降らす神だった。初めて葵と会った日も、雨を降らせた後だった。

降らせた雨を「綺麗」と言ってもらえたのは、何十年振りであつたか。雨が降る度に喜んではしゃぎ回る子供の姿も、神社へやってくる人間も見ることがなくなった今となっては、そんな人間を見たことが嬉しくて。思わず話しかけていたのだった。いつのまにか、諦めていたはずだったのに、神社を守ろうということになって。でも、守る“という約束を守れなかった。だから。

「最後までいい、綺麗に終わらせようじゃないか」

露葉が目を閉じると、たちまち空は曇り、稲妻がはしる。雨も次第に強まり、豪雨となって神社を襲った。工事をしてきた作業員達が驚き、さわいでいるのがわかる。二人は、まだかるうじて雨除けになる神社の屋根の下に座り、顔を見合わせて笑った。

「なかなかの見物だな」

「露葉ってすごいね」

しばらく、声をひそめつつ笑っていた二人だったが、露葉が突然、ばん、と手をたたく。すると、突如雨が弱まり、日が射して。

「あ……」

葵が、思わず感嘆の声をもらす。

そこには、初めて二人が会った時と同じ風景が広がっていた。

「終わり良ければ全てよし、なんてな」

隣では、くつくつと露葉が笑っていた。そして、葵の前に何かが差し出される。

「お前にやろう」

「……いいの？」

葵に差し出されたのは、万華鏡。

「万華鏡……これ、大事な物なんじゃないか」

「俺が持つていても、どこにも飾れないからな。お前のほうが大切にできるだろう」

万華鏡と露葉をしばらく交互に見つめ、葵はおずおずと万華鏡を受け取る。

「ありがとう。露葉」

「ああ。——さて、そろそろ昼になるな。」

帰ったほうがいいだろう」

「ふふ。いつも通りだね」

「まあな。じゃあ葵、また縁があれば」

「ん？ うん」

いつもと違う別れのあいさつに首をかきげつつ、葵は手を振る。

「またね、露葉！」

背を向けて、境内を走っていく。作業員達はどこかに避難したのか、その姿はない。

——しゃん。

小さく、鈴の音が響く。葵がふと振り向くと、露葉の姿はなかった。

——縁があれば。

「また会えるよね」

たとえ何年先だとしても。いつか。だからそれまで、少しお別れ。

「またね！」

葵はもう一度そう言うと、境内をまた走っていく。人知れず、ころりと万華鏡についた鈴が揺れる。

気づかぬ内に、さらさらと降っていた雨はやんでいた。